

## 木曾義仲受難の選択

——「人質・清水冠者の派遣」——

武 久 堅

はじめに

頼朝と義仲には共通の叔父行家の去就に言い掛かりをつけて、信濃の義仲から「嫡男・清水冠者」を、「意趣なき証しの人質」として提供させたのは、鎌倉の頼朝であった。義仲の勢力進展期に仕掛けられたこの事件は、義仲の出鼻を挫いただけではなく、後々の二人の力関係に少なからず影響を及ぼした。大きな代償を払っても義仲が行家を遠ざけなかった真の原因は何だったのだろうか。

口実を設けて近親憎悪という因縁の古い糸を再び紡ぎ出して、同族に圧迫を加えたのは鎌倉の頼朝であり、因縁の古い糸に搦め捕られたのは、同族との確執を逃れて信濃に人となつたはずの義仲であった。義仲には明らかに受難であった。よつて延慶本平家物語はこの事件を、「兵衛佐、木曾と不和」と呼んでいる。

事件発生の正確な年月は不明であるが、物語はこの確執の時期を、寿永二年（一一八三）春の事に設定し、源氏と平家一門との対決という大状況の中に織り込んでいる。『吾妻鏡』は寿永二年記事を欠くが、前後の年にこの事件へ

の言及はないので、『吾妻鏡』にも、寿永二年の出来事として記事のあつたものと判じておく。寿永二年は後に疑点も発生するが、一応のポイントである。

その寿永二年の正月行事は、平家が都で新年を祝った最後の節会となる。二月二日（物語では一日）に、この年六歳を迎えた当今（安徳天皇）が、祖父の法皇（後白河院）の蓮華王院御所に朝覲行幸し、この対面も結果的に両人の最後の対面となる。三月に平家軍は北陸路に義仲追討の兵を派遣し、宗盛は従一位に叙されている。

延慶本では第三末の七「兵衛佐、木曾ト不和ニ成ル事」として、物語に組み込まれる。本文形成について佐々木紀一氏は年代記『皇代暦』と、語り本及び四部合戦状本、延慶本の本文との先後の問題を取り上げるが、論証に足るだけの資料を欠く<sup>(1)</sup>。物語本文に比して『皇代暦』は簡略で、一部に文字遣いの異なる部分があるが、『皇代暦』あるいはその史料が、平家本文を遡るといふ立証はむづかしい。よって本稿はこの問題には深入りしない。

### 一 物語の場面構成

最初に把握しておきたいのは、物語におけるこの章の場面構成である。物語は出来事の展開に従って次の十場面から構成されている。

一 頼朝と義仲の不和の原因——行家が頼朝に墨俣合戦の功績を理由に、所領を所望するが断られたために、義仲の元に走る。

二 頼朝が、行家を近づけた義仲の頼朝攻撃を懸念し、先手攻略を企む矢先に、甲斐源氏武田信光が頼朝に義仲讒言を吹き込む。頼朝出陣。『陸奥話記』の先例。

\*三 義仲、越後と信濃の国境・関山に布陣し対戦の構え。

四 頼朝、天野藤内遠景に雑色足立新三郎清経を添えて使者とし、和平案として子息一人を要求する。

\*五 義仲、郎等共との協議の末に清水冠者を差し出すことを決し義基に申し渡す。

\*六 義仲、使者天野藤内遠景と対面して行家擁護の経緯を釈明し、起請文を持たせて義基を派遣する。

\*七 義基一行、道中で悲嘆の和歌を詠ずる。

八 武田信光の讒言の原因——清水冠者を婚に所望して義仲に拒否されたため。

九 頼朝、満足して清水冠者を具して鎌倉に引き上げる。

\*十 義仲、剛腕の郎等たちの妻三十人を集めて、戦回避のために人質派遣の道を選択した由の経緯を説明し、妻たちは感謝の起請を書く。夫たちも喜ぶ。

アステリスクの付された場面が義仲方の物語で、他は頼朝方である。両者の場面は全体としてほぼ交互に転換して、この物語がどちらか一方の側にのみ伝わる伝承譚として先行していたものでなかったことを明かしている。よって延慶本の記すこの「清水冠者」事件の物語は、語り手が両方の情報を入手しているという意味で、作者がある段階で出来事の経緯を組み立て、筋道を整えて作り上げた、作為のある物語ということになる。

ここで作者は、事件を仕掛けたのは頼朝の側であったと設定している。しかも難癖をつけて言い掛かりを付けたのは頼朝であるが、不和の原因を作ったのは行家の行動で、これに武田の讒言が加わる仕組みとしている。

頼朝の関わる物語組み立てにおいて、彼の行動契機として、取り巻きによる讒言を構えるのは、後年の義経の場合と同様で、これは頼朝物語に共通の着想と言える。よってこの事件も少なくとも延慶本や長門本では「頼朝、義仲の不和」であってその逆ではない。義仲の側に頼朝と不和を発生させねばならない直接的理由は設定されていない。覚一本で巻七巻頭に「清水冠者」と章題がくるので、人質を派遣する義仲方の物語に印象は傾くが、武力を背景として

頼朝が人質を略取した事件である。延慶本の物語構成はもっぱらそのように組み立てられている。義仲は終始受け身であり、行家に託つけられた受難者ということになる。語り本は総じてこの物語を簡略に構成し、出来事の背景を詳述しようとはしていない。これは語り本が全体的に鎌倉方の物語を略述する傾向と機を一にするが、頼朝の扱い方も関係する。

## 二 「不和」と「不快」

本文の語り出しは、

去ル比ヨリ、兵衛佐ト木曾冠者ト不和ノ事有リテ、木曾ヲ討ムトス。

とある。頼朝を「兵衛佐」と呼び、義仲は「木曾冠者」と呼ぶ。義仲は確かに無冠無位であるが、「兵衛佐」は正確には「前兵衛佐」でなければならぬ。設定は「兵衛佐」と「木曾冠者」との「不和」である。後に流布本など、二人の叙述順序を逆転させるテキストの出現に照らして、ここでは頼朝の側から事を叙述しようとしていることは明瞭である。また「不和」という用語は、延慶本では、この場面一回と、他には「山門ニ騒動出来事」(第二本四)の「山上ニハ学生ト堂衆ト不和ノ事有リテ」の二回のみである。「山門騒動」が山門内の熾烈な階級闘争であったことは、このあと「山門滅亡」へと状況の展開することによって明白である。「不和」とは、そのような決定的な意志的対立、いがみ合い、憎み合いを表現する用語である。

頼朝義仲の「不和」は、語り本では屋代本以降覚一本へとすべて「不快」に改められる。「不快」の方は、「病氣」に多く使用されるように意味合いは意志的というよりは、「仲たがい」、感情のもつれの程度である。「不快」は事態を軽く把握もしくは表現しておこうとする意図の働く言い方である<sup>12)</sup>。これに対して「不和」は決定的な対立の構図

で、表現としてはより重い言葉なのだと解釈される。「不和」の最大の原因はこの後すぐに、武田信光の讒言に起因すると明かされるが、ちなみに同じく梶原景時の讒言に端を発する頼朝義経の関係を、『義経記』では「不和」とは語らず、両者の関係をはつきりと「頼朝義経御中不和にならせ給ふ」と明言するのは、謡曲「安宅」のワキ富樫の台詞からである<sup>(3)</sup>。『吾妻鏡』もこの関係を一貫して「義経反逆」と捉えるのはこの著の立場、即ち幕府の正史として当然であろう。「不和」は事態の激しい認識である。延慶本は「兵衛佐卜木曾冠者卜不和ノ事有リテ」と叙して、直ぐ「木曾ヲ討ムトス」と展開したのは、事態に臨む頼朝の心境を反映している<sup>(4)</sup>。事態はなぜそのように性急でなければならなかったのだろうか。続いて、

其故ハ、兵衛佐ハ、先祖ノ所ナレバトテ、相模国鎌倉ニ住ス。叔父十郎藏人行家ハ、大政入道ノ、鹿嶋詣アト（名付て、東国へ下あるべかりけるに、大庭三郎がさた）シテ造り儲ケタリケル、相模国松田御所ニゾ居タリケル。

とあるが、延慶本に脱漏があるので、括弧内は長門本（国書刊行会本による）で補った<sup>(5)</sup>。組み立てられた物語の整合性を確認するために叙述の細部を考証するに、行家の居住していた「松田御所」とは、『吾妻鏡』によると相模国にあった「中宮大夫進朝長」の旧宅で、かつて黄瀬川に進出した頼朝が中村庄司宗平に命じて修理に取り掛かってあった源家の由緒のある「松田御亭」のことである（治承四年十月十八日条。富士川合戦の直前に、相模の国府に到着した十月二五日に、頼朝はこの「御亭」に入って旅宿としている。「侍廿五間の萱葺き屋なり」と記している。下って承元四年六月の頃に松田・河村の一族と土肥・小早河の輩が相模国丸子河周辺で衝突しているので、松田は在地者たちのかんりの集団を形成しうる環境にあった。「大政入道ノ、鹿嶋詣アト」「名付て、東国へ下あるべかりけるに、大庭三郎がさた」「シテ造り儲ケタリケル」の史的考証は難しいが、清盛の東国支配策の一環という口実の元に、大庭三郎がかつての源氏の邸宅に踏み込んで修造したのであろう。行家は修復された「松田御亭」を占拠してここに居着

いていたのであろう。

所領一所ナケレバ、近隣ノ在家ヲ追補クシ、夜討チ強盜ヲシテ世ヲ過シケリ。

とある。「夜討チ強盜」は溢れ者の常套行動であるから、行家に居着かれて近隣の在家は迷惑であつたろう。

### 三 武田五郎信光の讒言

続いて行家は

或時行家、兵衛佐ノ許ヘ文ニテ云ヒヤリタリケルハ、「行家ハ御代官トシテ、美乃国墨俣ヘ向フ事十一度、八ヶ度ハ勝チテ三ヶ度ハ負ケヌ。子息ヲ始メトシテ、家ノ子郎等ドモ多ク打チトラレテ、嘆キ申スハカリナシ。国一ヶ所預ケタベ。是等ガ孝養セム」トゾ書キタリケル。

と頼朝に泣きつくことになる。行家の墨俣合戦は、物語では、第三本九「行家ト平家美乃国ニテ合戦事」(物語では治承五年一月末頃の記事)が最初でこれは負け戦として書かれ、第二回の戦は第三本廿三「十郎藏人ト平家合戦事」(治承五年二月末頃の記事)でこれは勝ち戦となっている。『吾妻鏡』には、治承五年二月に、この戦には行家の名前は見えませんが、美濃国で討たれた源氏の首が入洛したという記事があり、三月十日条に、

十郎藏人行家・子息藏人・太郎光家・同次郎・僧義円卿の君・泉太郎重光、尾張・三河両国の勇士を相具して、墨俣河の辺に陣す。

とある。行家の夜襲計画を察知されて、源氏勢は防戦に利なく、義円は盛綱に討たれ、藏人次郎は忠度に捕虜となり、命を落とす者すべて六百九十余人と記している。延慶本の行家の請願は出陣回数とは別として必ずしも誇張ではない。しかしこの請願に対する頼朝の反応は、

「木曾ノ冠者、信濃上野両国ノ勢ニテ、北陸道七ヶ国打チ取リテ、既ニ九ヶ国ガ主ニナリテ候。頼朝ハ六ヶ国コソ打チシナヘテ候へ。御辺モイクラノ国ヲ打チ取ルトモ、御心ニテコソ候ハメ。サテコソ院内ノ見參ニモ入ラセ給ヒテ、打チ取ル国何ヶ国トモ、注シ申サレテ給ワラセ給ハメ。当時頼朝ガ支配ニテ、国庄ヲ人ニ分ケ給フベシト云フ仰セラモカブリ候ワズ」

と冷淡であつた。この頼朝の反応には史実の展開面で整合性の綻びがある。頼朝が、自分にはまだ国庄を分け与える支配権は与えられていないというのはこの時点の頼朝として誤りのない対応である。しかし、相手の義仲の事となると、その北陸進撃は物語によるとこの年の四月一七日以降で、物語の設定されている寿永二年春の段階では、「北陸七ヶ国打チ取り」はまだ実現していない。「北陸道七ヶ国」というのは、通常は「若狭・越前・加賀・能登・越中・越後・佐渡」を指すので、入洛直前の義仲の情勢を前提にものを言っていることになる。「清水冠者事件」の正確な時点は不明であるが、義仲の北陸進撃の最中ということはあり得ないので、頼朝のこの返答は物語のこしらえものである。この拒否を受けて行家は義仲の元へと走り、頼朝の義仲攻撃の口実となる。

兵衛佐是ヲ聞キテ、「十郎藏人ノ云フム事ニ付キテ、木曾冠者、頼朝ヲ責メムト思フ心付キテムズ。襲ワレヌ先ニ木曾ヲ討タム」ト思ヒケルヲリフシ、

という頼朝は猜疑心先行の反応である。この猜疑心の裏返しは、義仲方から今井四郎兼平の口から発されることになるので、頼朝義仲の関係は、共に相手の心中を疑いをもって読み合うという設定になつている。この猜疑心に輪をかけたのが、甲斐源氏の武田五郎信光の讒言である。

信濃ノ木曾二郎ハ、ヲトトシ六月ニ、越後ノ城ノ四郎長茂ヲ打チ落トシテヨリ以来、北陸道ヲ管領シテ、其ノ勢雲霞ノ如シ。

梟患ノ心ヲ挿ミテ、『平家ノ婿ニナリテ、佐殿ヲ討チ奉ラム』トハカルヨシ承ル。平家ヲ責メムトテ、京へ打チ上ルヨシハ聞コユレドモ、実ニハ、平家ノ小松内大臣ノ女子ノ、十八ニナリ候フナルヲ、叔父、内大臣ノ養子ニシテ、木曾ヲ婿ニ取ラムト

テ、内々、文ドモ通ハシ候フナルゾ。其ノ御用意アルベシ。

越後の城の四郎との合戦を一昨年と語っている。現時点を寿永二年とすると、一昨年は治承五年の六月となり、延慶本の第三本廿六「城四郎ト木曾合戦事」と符号している。しかし「北陸道の管領」というのは時期尚早である。また「重盛の女子」との縁組はいかにも荒唐無稽である。着想の根底に、義仲が入洛後に頼朝との不和が鮮明になり、瀬戸内の平家と組んで鎌倉と対決しようとした、後日の義仲の動向が反映するかも知れない。しかしこの密告の内容に怒って出兵を決する頼朝造型はやや性急で、作者は自覚していないが頼朝像を軽薄化している。物語構成八で、武田がなぜこういう讒言に及んだか、その理由を次のように語っている。

武田五郎信光、木曾ヲアタミ、兵衛佐ニ讒言シケル意趣は「彼清水冠者ヲ信光ガ婿ニトラム」ト云ヒケルヲ、木曾ウケズシテ、返事ニ申シタリケルハ、「同ジキ源氏トテ、カクハ宣フカ、娘モチタラバマイラセヨカシ。清水ノ冠者ニツガワセム」ト云ヒケルゾ、アラカリケル。信光是ヲ聞キテ、ヤスカラズ思ヒテ、イカニモシテ木曾ヲ失ハムト思ヒテ、兵衛佐ニ讒シタリケルトゾ、後ニハ聞コヘシ。

甲斐の武田氏が義仲と婚姻による接近を試みるということは、甲斐と信濃という地域的隣接という意味では有り得る。しかし『吾妻鏡』ですつと時代の下る寛元三年（一二四五年）に最終記事をもつこの五郎信光が、寿永二年（一一八三年）以前の時点、つまり最終記事より六二年以上以前に、当時十一歳であった義基を婿に取るに相応しい娘をもっていたかどうかは疑われる。また延慶本においても『吾妻鏡』の信光においても、信光記事にこの讒言の影は皆無である<sup>61</sup>。それだけではなく、この讒言の一番の疑問点は、武田信光がなぜ義仲と平家の小松重盛接近を情報として入手しえたか、このあたりにもある。讒言とは事実を偽って、あるいは曲げて相手を落とし入れることという意味で、まさに事実歪曲であるが、讒言に触発されて事を図ろうとする当の頼朝には、讒言の中身は客観的に成り立つも

のでなければならぬ。客観的に成り立ちがたい讒言によって事を運ぶと、運んだ側の欠損になる。頼朝は人物造形においてこの欠損を負わされている。本稿の最初で、組み立てられた物語として認識したこの延慶本の清水の冠者物語の細部の事実性にはかなりの無理がある。それほどに語り手には、頼朝をして「木曾ヲ討ムトス」と性急に決意させるに至る動機付が必要であつた。行家の去就と武田の讒言という二つの理由を構えて頼朝の信濃出兵は開始された<sup>(7)</sup>。

#### 四 行家と信救と義仲三者の出会い

行家の墨俣合戦は、その戦績以上に、最終的に義仲に引き合わせることになるという意味で信救（覚明）との出会いの意義が大きい。

延慶本は義仲の入洛直前に展開する「木曾山門牒状」に際し、その執筆を覚明に委嘱し、ここに当の覚明の素性に解説を加えている。義仲の物語の成立には不可欠の逸材であるから、早くに梶原正昭氏<sup>(8)</sup>によって軍記の形成と「手書き」の働き、特に義仲合戦譚の形成への関与が着目され、水原一氏<sup>(9)</sup>も軍陣と手書きの関係の一般的問題には再考の余地ありとしながらも、覚明の働きについては肯定的に継承された。「木曾大夫覚明」の名は、既に義仲が越中国「埴生八幡願書」を奉納した場面に見え、願書はもう一つ前にやはり覚明文書と思しい「木曾白山願書」もあるの<sup>(10)</sup>で、人物紹介は当然もつと早くに挿入されてしかるべきであるが、この最終の「山門牒状」まで持ち越されている。本稿では、覚明その人に考証を加えることを目的とはしないので、前半の南都時代は省くとして、後半を引くのは南都脱出後の覚明の動向を重視するからである。

信救ナヲ、ミヤコノ辺ニテハ取ラレナムスト思ヒテ、鎌倉ヘ下リケルニ、十郎藏人行家、平家追討ノ為ニ東国ヨリ都ヘ責メテ

リケルガ、墨俣川ニテ平家ト合戦ヲトク。行家散々ニ打チ落トサレテ引キ退キ、三川ノ国府ニ付キテアリケル所ニ、信救行キ合ヒテ行家ニ付キニケリ。(一部略) 次第二膨脹モナオリテ、本ノ信救ニナリニケリ。行家、三河ノ国府ニテ伊勢大神宮へ奉リケル願書ヲモ信救ゾ書キタリケル。信救又木曾ヲ憑ミテ、改名シテ木曾大夫覚明トゾ申シケル。

(第三末十七「木曾都へ責メ上ル事、付ケタリ覚明ガ由来事」)

信救が先ず鎌倉を目指したらしいことは、『吾妻鏡』にでている後半生の彼の「伊豆山帰属」という行動に符号する。途中、墨俣で行家に遭遇するのが負け戦の時と設定されているので、物語の中で該当するのは治承五年一月末の合戦である。「南都牒状」は治承四年五月であるから、信救は墨俣で行家に遭遇するまで約七ヶ月の逃亡、遍歴を経ていることになる。両者の出会いは三河の国府(今日の豊川市西部)とあり、行家は墨俣からこの地まで退却している、東海道を関東に向かう信救がここまで到達していたのである。顔面に漆を浴びて変装していたが、この頃にはほとんど治癒していたとあるのは七ヶ月という期間と整合する。なお、延慶本では二回目合戦を勝ち戦とし、これに続けて第三本廿四「行家大神宮へ願書ヲ進スル事」があり、その作者名は記されていないが、右の本文によって初めて信救の手になることが明かされる。三河の国府をこの当時の行家は拠点としていたのであろう。この長文の「伊勢願書」には、

「行家、朝敵ヲ防ガムガタメニ東国ニ下向シテ、頼朝ノ朝臣ト相共ニ、且ハ源氏ノ子孫ヲ誘へ、且ハ相伝ノ所従ヲ催シ」

と述べ、再度、

「爰ニ行家、王城ニ帰参シテ王尊ヲ護リ奉リ、頼朝ハ東州之辺界ニ於テ西洛ノ朝威ヲ輝カス」

とあって、行家と頼朝の連盟が謳われている。この後「松田御亭」に戻つてやがて先に引いた頼朝への書簡へと展開し、頼朝行家の連携が破綻する。当の信救は、上記の文で「信救行キ合ヒテ行家ニ付キニケリ」とあるから、「松田

御亭」に行動を共にし、これは推量であるが、頼朝への書簡とその内容は行家の窮状を見て取った信救の発案で、代作であつたかも知れない。延慶本は「伊勢願書」に続いてすぐ、「信救又木曾ヲ憑ミテ、改名シテ木曾大夫覚明トゾ申シケル」とあり、ここに行家と頼朝の決裂の経緯に言及することはないが、一旦「行家」に付いた信救が突然木曾に方向転換し、「木曾大夫覚明」と改名するのは、行家の頼朝からの離反、義仲への接近という経緯に、一貫して行動を共にした信救の選択と考えるのが妥当ではないか。義仲に信救を橋渡しをしたのは行家以外には考えられない。

先に義仲の緒戦―横田河原合戦を分析して、武水別神社・八幡宮大本堂への祈願に際して義仲の願書が物語に持ち込まれていないのは、その時点ではまだ覚明が義仲陣に参入していなかったためであろうと推察しておいたが<sup>(10)</sup>、上記の動向からみて信救、行家、義仲三者の遭遇と邂逅の次第は物語に正確に反映していると考えてよい。しかも信救と行家との関係は「遭遇」であり、信救と義仲とは信救が「木曾大夫覚明」と改名するに至つたという記述からみて「邂逅」と言える。

行家は墨俣合戦の功績を頼朝に訴えて拒否され、義仲の元に走つたと物語は記すが、義仲はそのとき、行家という厄介者を背負い込んだだけではなく、同時に、墨俣で行家と出会っていた大夫房覚明を同伴者として迎え入れたのである。有力な手書きを陣中に擁する契機となつたのである。行家の義仲接近は、大夫房覚明という大きなお土産付きであつた。ここに行家の墨俣合戦敗戦の義仲にとつての副次的意義がある。

覚明が義仲に接近した直接的契機は行家の仲介にあつたが、覚明にとつての内的要因は、彼が執筆した「木曾山門牒状」に盛り込まれている。その部分を訓読に改めて引く。治承四年五月の平家による高倉宮襲撃に際し、宮が脱出して園城寺に身を寄せた場面を叙するくだりである。

其ノ時、義仲ガ兄源ノ仲家、芳恩ヲ忘レガタキニヨツテ、同じク扈從シ奉ル。

〔第三末十八〕木曾山門ニ牒状ヲ送ル事、付ケタリ山門返牒事〕

この経緯は、仲家が頼政と行動を共にし、やがて宇治平等院に最期を遂げるに至る事実としてよく知られている。「牒状」は次のように続く。

翌日ニ、青鳥飛ビ来リ、令旨密ニ通ジテ、義仲急ギ参ズベキノ催シアリ。忝ナク敵命ヲウケタマハリ、預参ヲ企テムト欲スルノ処ニ、平家此ノ事ヲ聞キテ、前右大将、義仲ノ乳母仲原ノ兼遠ノ身ヲ召シ籠ム。其ノ上重ネテ義仲ガ住所ニ人ヲツケテコレヲ伺ヒ、路ヲ固メテ討チ取ラムトホッス。然ト雖モ、義仲身命ヲ捨テテ逃参ス。是上京ノ初メナリ。

兄の仲家から弟の義仲に令旨が来たとするのである。義仲伝記とすればこれは新事実である。いや、事実であるかどうかは分からない。ただ延慶本では義仲登場の場面で、その生い立ちが詳述され、成長期のある段階で平家の偵察に上京体験のあることは記されてあった。事実というよりは話型の活用であろうと判じておいた<sup>11)</sup>。またその場面では高倉宮事件と関連づけた上洛とは設定されていなかったが、乳母の兼遠もまた平家から監視の目を受けたという組み立てになっていた。いずれにしても義仲の伝記的事実というよりは、物語の設定として物語の叙述と「牒状」の内容を照応させて読むのが適当であろう。覚明は代筆の牒状にこの設定を生かし、高倉宮の事件に際し、義仲は兄仲家に呼応する行動を起こしてもいたという活躍を強調することによって、南都で行動を起こした自らの過去と、現在の行動との内的接点を用意し、また義仲との「邂逅」の必然性を確認したのである。作品の読み解きの上で、延慶本の本文の組み立てと「牒状」等の文書の内容上の関連は今少し注目してもよい、その一例と言える。

## 五 「今参り」と「乳母子」

場面三「義仲、越後と信濃の国境・関山に布陣し対戦の構え」は本章の中で最も不明確な部分である。事態の進展

を正確に把握できないままに、この不可解な対戦の構えを組み立てた、事実確認のむつかしい場面である。義仲がこの段階で信濃と越後の国境の関山に退いたというのも、頼朝が十万騎の軍勢で碓井峠を越えて信濃に進攻したというのも誇張が過ぎる。これでは信濃一国を明け渡したにも等しい。頼朝が「樟佐川（あづさがわ）」の端に布陣したというのも、今日の「梓川」では位置が合わない。長門本の「佐椅川（犀川）」が本来の表記であろう。直前の、これは頼朝側の記事に属するが、『陸奥話記』に依拠して「往亡日」をめぐる「宋」の「武帝」の先例を、頼義の「小松の館」攻めに併せて引用するのも、先に指摘しておいたように、この章全体が編纂物として組み立てられたという例証であろう。延慶本の著述部である。

続いて場面四の、頼朝からの和平の使者派遣に入る。使者に推挙されたのは天野藤内遠景で、伝達しなければならぬ頼朝の言葉の復元の実否の検証役に足立新三郎清経が差し添えられた。物語はその強圧的な言葉伝承を見事に再現している。頼朝の命令の介添え役として働く雑色清経については、既に福田豊彦氏に、簡潔ながらその役回りを史実と伝承の両面にわたって把えたレポートがあり、頼朝の耳目代わりとして活躍した実像が見事に取り押さえられている<sup>22</sup>。延慶本では役回りの質は異なるが、義仲へのこの場面と、他に義経の見張り役の使命を帯びて京に差し遣わされて、刺客土佐房が義経を打ち損じたという情報を頼朝にいち早く伝える第六末九「土佐房昌俊、判官ノ許へ寄ル事」にもう一度登場している。義仲の場面の方は史実というよりはその雑色としての名声ゆえに、物語にその名の活用された一類型であろう。

主役の天野藤内遠景については、延慶本ではこの場面を除くと他に、鎌倉勢揃えに二回その名を載せる。頼朝拳兵以来の有力側近で晩年に至るまで勢力を維持しているが、この場面にみる人物伝承は不明である。伝達された頼朝の言葉には焦点が二つあり、行家を鎌倉に差し戻すか、さもなければ、

「御辺ハ公達アマトオワス也。成人シタラム子息一人頼朝ニタベ。一方ノ大將軍ニモシ候ワム。頼朝ハ成人ノ子持ち候ハネバ、加様ニ申シ候フ也。カレヲモコレヲモ子細ヲ宣ハバ、ヤガテ押し寄せて勝負ヲ決スベシ」

という「人質派遣」の要求であつた。義仲はこれらの要求に、

根井、小室ノ者共ヲ召シ集メテ、「我が心ニテ我が身ノ上ノ事ハハカラヒニクキゾ。是ハカラヘ」

と、根井、小室の者共に対応策の案出を委ねている。彼らの出した結論は、ここで鎌倉殿と木曾殿とが仲違いするのは、平家を喜ばせるだけである。行家が「帰ラジ」と言うなら「清水ノ御曹司ヲ鎌倉殿へ渡シマヒラセ給ヘカシ」であつた。ここで乳母子今井四郎兼平の発言となる。兼平の提案内容は、

「ヲソレニテ候ヘドモ、各々アシク申し給フ物哉。弓矢取ルナラヒ、後日ヲ期スル事ナキ者ヲ。ツイトシテハ、御中ヨカルベシトモ覚ヘ候ハズ。多胡先生殿ヲバ、悪源太殿打チマヒラセテマシマセバ、遂ニ親ノ敵ト思ヒ給ワラムト、鎌倉殿ハ思ヒ給ワラム。イカサマニモ一度軍ハ候ワムズラム物ヲ。只事ノ次デニ、御返事シタタカニ仰セラレ返ヘシテ、一戦シテ、御冥加ノ程ヲモ御覽セヨカシ」

という頼朝との対決案であつた。兼平は事態を、頼朝の兄・悪源太義平による義仲の父・多胡先生義賢討ちという、両者の関係の原点において把握している。しかもこの原点は同時に幼少時代の兼平と義仲の出会いの契機そのものでもある。二人の出会いがその幼少期であつたという経歴からすれば、兼平のこの把握は父兼遠からの刷り込みによると考えるのが順当であろう。よつて頼朝への返答も相手に十分に手応えのある抜かりない「シタタカ」なものだければならない。対戦は覚悟の上である。兼平は義仲の「冥加」を信じてここまで付き従ってきた人でもある。しかし覚悟の対決は空しく持ち越されて、事態はひたすら「入洛後」の義仲へと先送りされるであろう。即ち、義仲はこの提言を、

「今井ハ乳母子也。根井、小室ハ今参リ也。乳母子ガ云フ事ニ付キテ、是等ガ云フ事ヲ用キズハ、定メテ恨ミムズ。又カレ  
ラニステラレナバアシカリナム」ト思ヒテ、

という「今参り」への配慮によって退ける<sup>13)</sup>。木曾の山中から乳母夫兼遠が義仲につけた中原一族の勢に対して、佐久地方の根井・小室の配下は既に比較にならない優勢を誇っていたのであろう。少数の「乳母子集団」と多数の「今参り集団」は、義仲立身に不可欠の、「原点」と「周縁」の関係にすり替わり、ここでは義仲の周縁重視策とならざるを得ない。かくして「清水冠者」、この人質となる嫡男の悲運の生涯は開始する。また「乳母子」と「今参り」という規模も性格も異なる二つ集団の隠微な角逐は、これもまた「粟津の松原」、雪深い信濃から都を目指した義仲集団が追い詰められた最終情景にまで持ち越されるであらう。

義仲は使者天野藤内遠景に「酒ススメ、馬引キ、引キ出物ナムドシテ」と、手厚いもてなしを用意して対面する。兼平の「シタタカ」とは正反対の姿勢であるが、義仲の対人姿勢は一貫して饗応の精神で貫かれている。これは入浴後の「猫間中納言」への「平茸」饗応まで不変であり、既に考察を加えた木曾山中での青年期義仲の接客態度にも共通している。乳母夫兼遠も「酒盛ナムドシテ、人モテナシ遊ブ有リ様モアシカラズ」と観察した。こういう気配りは作者の創作というよりは、ある程度は実態を反映する天性の姿の伝承と見てよからう。義仲は終始低姿勢で、自らに全く「意趣」はなく、叔父行家も頼朝に対して「御意趣フカカルベシト存ゼズ」と申し開きをし、その上で、「義仲ガ参リテ番ノ宿直ヲ仕ルト思ヒ給ヘ」との言葉まで添えて、「一心（ふたごころ）」なき由の「起請代ノ文」を書き、「嫡子ノ小冠者義基十一歳」を派遣する。周到にして老獪な頼朝と、愚直なまでに純朴な義仲の姿の対照される場面である。

## 六 「清水冠者義基」派遣の真意

延慶本は一貫して「清水冠者義基」と記す。『吾妻鏡』は「志水冠者義高」（元暦元年五月一日）と表記する。『尊卑分脈』は「号越前守・従五位下、義基、母今井四郎兼平女」と作る。「義基」か「義高」かあるいは他本の「義重」かは決め手がない。ここでは延慶本と『尊卑分脈』に従って「義基」を用いたい。母親が今井兼平の娘であるというのは、兼平が義仲の一歳年長という点から成立は難しい。兼平の姉妹に巴を設定して巴説もあるが根拠はない。この嫡男の出自についての確実な情報は「清水」「志水」だけである。

信濃国十五駅の一つに「清水駅」がある。『延喜式』卷二十八「兵部」の「諸国駅伝馬」の「信濃国、駅馬」に「巨理・清水各十疋、長倉十五疋」等と記載のある古代東山道の駅名である。『角川日本地名大辞典・長野県』付載の「古代交通図」によると延喜式にみえる東山道は、上野国から碓氷峠を越えて信濃国に入ると、最初の駅が「長倉」でここに「馬十五疋」、古くは佐久郡であるが今日の軽井沢町中軽井沢に地域名として残る。西へ向かって次の駅が「清水」で「馬十疋」、ここで道路は南から北流する千曲川と出くわし、川に沿って右岸を下ると「巨理」に至り、東山道はここで地名のとおり、千曲川を渡って西に浦野、錦織へと向かっている。今仮に義仲が幼年期にたどったはずの東から西へのコースで説明してみた。青年期に拠点を木曾から再び根井・小室を頼って佐久一帯に移し、父親の勢力範囲であった上野国に越えるときには、これを逆にたどりもした古代の道路である。「清水駅」は今日の小諸市に位置し、上記の『地名大辞典』は、古代「清水駅」の所在を、小諸市大字「諸」と大字「丙」にまたがる字「大門」を中心とする区画に比定している。「諸」地区の一角に今も「弁天清水」と呼ばれる清水が湧出して飲料可能で、これより南方一帯を現地では「清水田」と称している。「清水の冠者」物語の考証に残された数少ないデータからする

と、少年の所在地はこの東山道「清水駅」近辺ではないかと推察される<sup>(4)</sup>。

延慶本では二回にわたって当年十一歳と記されているから、義基の生年は承安三年（一一七三）となり、義仲は寿永二年は三十歳であるから二十歳の年の出来事に当たり、彼が木曾の中原兼遠の元を離れ根井・小室の佐久郡に拠点を移したのもこれより数年前の頃かという事になる。

延慶本ではこの章で義基は、前後二回にわたって登場している。一度は義仲が派遣を申し渡す場面、再度は鎌倉に越える道中である。平家物語のそれほど多くはない少年文学の情景であるから、全文を引いて考察を加えたい。

生年十一才ニナル、清水冠者義基ヲヨビヨセテ、「人ノ子ヲワギミホドマデソダテテ、他人ノ子ニナスベキニテハアラネドモ、十郎藏人ハ『婦ラジ』ト宣フ。ワギミヲヤラスハ、只今兵衛佐ト申違ヒヌベシ。ナニカハクルシカルベキ。イソギ佐殿ノ方へ行ケ。果報ナカラムニハ、一所ニ有リトテモ叶フマジ。冥加アラバ、所々ニ有リトモソレニモヨルマジ。トクトク出デ立ツベシ」ト云ヒケレバ、清水冠者心細クハ思ヒケレドモ、子細ヲ云フベキ事ニアラネバ、母ヤ乳母にイトマヲ乞ヒテ出デ立チケリ。

「人ノ子ヲワギミホドマデソダテテ、他人ノ子ニナスベキニテハアラネドモ」——義仲の苦衷はここに尽きる。かつて二歳にして母親に抱かれて信濃に越え、「他人ノ子」となつて育つた義仲の、三十年の辛酸が凝縮されて、いまその体内から絞り出されてきたような一句である。こうした義仲の言葉伝承の実態を検証する手立ては皆無である。言葉伝承ではなく、いずれかの段階の物語作者の創作であつたかもしれない。そうであつたとすれば、その作者は、義仲の苦しみをそのように想像して共有できた作者である。反対に何ほどか継承されて物語に定着された義仲の言葉伝承であつたなら、そのどこかに、実在の義仲の心の片鱗は預けられてもあるであらう。受け止めた嫡男義基は、鎌倉にあつてくる日もくる日も、少年のころで、かつてこのように切り出すしかなかつた父親の追い詰められた状況と

その心情を思い、そこに包み込むような深い情愛を感じたであろう。やがて鎌倉を脱出し、武蔵国入間川のほとりに惨殺される、その時まで、おそらくは彼を支え続けた恩愛の情の一句となるであろう。

「他人ノ子ニナス」と義仲が決めたこの「人質」を、『吾妻鏡』は義仲没後三ヶ月目の元暦元年四月廿一日条で、

去ル夜ヨリ殿中イササカ物騒、コレ志水冠者、武衛ノ御婿タリトイヘドモ、亡父スデニ勅勘ヲ蒙リテ戮セラルルノ間、ソノ子トシテソノ意趣モツトモ度リガタキニヨツテ、誅セラルベキノ由、内々思シメシタチ、コノ趣ヲ昵懇ノ壮士等ニ仰セ含メラル。

と、「頼朝の婿」と呼んでいる。待遇は大姫の婿であったことは鎌倉方には周知であつたらう。しかし義仲はこの嫡男を最初から「他人ノ子ニナス」という決意で送り出すその心境は、「果報ナカラムニハ、一所ニ有リトテモ叶フマジ。冥加アラバ、所々ニ有リトモソレニモヨルマジ」という「果報」と「冥加」への賭けであつた。物語は『吾妻鏡』に記されることになるこの少年の運命の行方を知り尽くして、この「果報」と「冥加」への義仲の賭けを、物語の義仲の言葉伝承に持ち込んだのであろう。「所々ニ有リトモ」の表現には、義仲の心底からわき出るような離別の悲哀が滲む。

この敵命を受けた義基を物語は、「清水冠者、心細クハ思ヒケレドモ、子細ヲ云フベキ事ニアラネバ」と、「心細クハ」と率直な心情を記し、同時に「子細ヲ云フベキ事にアラネバ」と、その命の絶対を感じ受ける少年として造型している。「母ヤ乳母ニイトマヲ乞ヒテ出デ立チケリ」は、やがて『清水冠者物語』に成長するこの出来事の叙述様式を型として匂わせている。

義基の物語は鎌倉に連行される三人の少年たちの、道行きにも似た場面で終わる。



野小太郎の前で泣きもしたのである。道すがら泣く義基に、小太郎が「ヲサナケレドモ、弓矢ノ家ニ生マレヌレバ、サハ候ハヌ物ヲ。イカニカクハワタラセ給フゾ」と咎め励ます姿は、父親・義仲とその乳兄弟・今井兼平の「粟津合戦」の姿を二重写しにしている。『吾妻鏡』は鎌倉在任中の彼を、

シカウシテ、海野小太郎幸氏ハ志水ト同年ナリ。日夜座右ニ在リテ、片時モ立チ去ルコトナシ。

と叙しているが、使命を果たさんとする幸氏の健気な姿を端的に写し取っている。

道中で二人が和歌を交わす趣向は、既に室町物語の風情を帯びて、信濃育ちの弓矢の家の少年像から遊離しているが、十一歳の二人の少年の心情はよく捉えている。これも『吾妻鏡』の叙述に基づくが、義基の身に危険が迫って、大姫の女房たちの采配で女装し鎌倉を脱出した義基に代わって、日ごろの義基の「帳台」に入って身代わりを演じ、

日闌クルノ後、志水ノ常ノ居所ニ出テ、日米ノ形勢ヲ改メズ、一人双六ヲ打ツ。志水双六ノ勝負ヲ好ミテ朝暮ニコレヲ翫ブ。

幸氏必ズソノ相手タリ。

とある小太郎の行動と共通で、同年ながら兄の如くに庇護する小太郎像は両者に一貫している。「道ノ草葉」と「涙ノ雨」は、さながらに二人の末路を手繰り寄せる「道行き」の歌に似ている。兼平がここは一戦交えて「御冥加ノ程ヲモ御覽セヨカシ」と提案し、義仲はこれを退けて、敢えて「冥加アラバ、所々ニ有リトモ」と応じて実子を鎌倉に放った、その行方を暗示するかの如き「涙の雨」であった。しかしいずれの平家物語もこれ以上は「清水冠者」のたどった運命を追うことはなかった。頼朝に追われた義経の末路を平家物語が語らなかつたと同様に、延慶本という頼朝の果報めでたき物語には差し支えがあつたのである。

延慶本は最後に一つの後日譚を加える。そこで義仲は、頼朝との衝突を回避した自らの選択の真の原因を明かしている。頼朝は清水冠者を引き連れて鎌倉に去り、義仲は信濃に戻る。義仲はここで、配下の「キリ者三十人」の妻女

を呼び集めて、「各々が夫共ノ命ヲ、清水冠者一人ガ命にカヘツルハ、イカニ」と問いかける。妻共は手を合わせて喜んで、「アラカタジケナヤ。カヤウニオワシマス主ヲ、京・筑紫ノ方ヨリモ見捨テ奉リテ、妻ヲ見ム、子ヲ見ムトテ帰リタラム夫ニ名鉢合ハセバ、モル日月ノ下ニスマジ。社々ノ前ワタラジ」と口々に言い、「起請」を書く。「夫共モ是ヲ聞キテハ、面々ニ手合ハセテ悦ビケリ」と語つて話を閉じている。

義仲が妻たちにしたこの報告を恩着せがましいと解する読みもある。が、作者が物語の結びにこのエピソードを置く意図は、兼平の主張した頼朝との対決説を退け、根井・小室の人質派遺説を採択した義仲の真意が、戦によって失われる人的犠牲の大きさの忌避にあつたと解き明かすことにある。根井・小室という「今参り」の提案の背後の真意を義仲はするように受け止めていたのである。実践の場で失われる男たちの命と、背後にあつてその無事を切望する妻子の真の願いを直覚したのである。人質派遺案のそれは言葉にされなかつた真情の理解に等しい。逆に言えば作者は、義仲の姿勢を、戦によって信濃在地の人々の生命の失われることを忌避するためにこそ、「嫡子」を犠牲に供することを厭わなかつたと語りたかつたのである。この「清水冠者事件」を語つて、在地の人々にこのような観点から支援された義仲像のあつたことを、物語を閉じるに当たつてもう一度確認しておきたかつたのである。「妻ヲ見ム、子ヲ見ムトテ帰リタラム夫ニ名鉢合ハセバ、モル日月ノ下ニスマジ<sup>四</sup>」「社々ノ前ワタラジ」——妻女たちのこの純朴な誓言から浮かび上がる義仲伝承は、用語面から見ても伝承と呼ばれるにふさわしい在地性を写して物語作者に筆録されているのではないか。「モル日月ノ下ニスマジ」「社々ノ前ワタラジ」という妻たちの決意表明は、信濃一國における義仲敬慕の実相を浮かび上がらせるだけではなく、妻たちの生の言動の採取によって、その思いを発信した現地の人々の生活の位相をも合わせ伝えることになる、義仲にまつわる素顔の言葉伝承ではなかつたらうか。

註(1) 佐々木紀一氏「平家物語」「頼朝義仲不和」の成立について」(山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告第25

号所収、一九九八年三月)

(2) 『保暦間記』では「兵衛佐頼朝ト木曾冠者義仲ト仲悪キ事有リテ既ニ木曾追討ノタメニ信濃ヘ下向ス」とある。「仲悪キ事」モ「不快」と同類の表現である。

(3) 角川古語大辞典の「不和」の項は、謡曲「安宅」の例を引くが、延慶本の用例が引かれてよいのではないか。

(4) 流布本系の古活字本では「木曾冠者義仲、兵衛佐頼朝、不快の事ありと聞えけり」と不快の仕掛け人を義仲の先行に移してしまふ。史料でこのかたちは「二代要記」が「木曾、頼朝ト不和、頼朝、木曾義仲ヲ討タムト欲ス」とある。

(5) 内閣文庫蔵本(影印版による)では「名付て、東国へあるべかりけるに、大庭三郎がさと」とあって、「下」の一字を欠く。「下」は「くだり」と読ませる、この場合は名詞で、延慶本にも「クダリ」「御クダリ」は多数用例があり、ここはある方がよく、国書刊行会本が本来の姿であろう。

(6) 佐々木氏は前掲論文で、武田氏の系譜考証によって、『皇代歴』の「武田」に「武田五郎信光」を宛てたところから問題が発生したと解しておられる。

(7) 「二代要記」「保暦間記」はいずれも「武田讒言」「武田五郎信光ノ讒言」を踏襲している。

(8) 梶原正昭氏「軍僧といくさ物語——太夫房覚明の生涯」(初出、日本文学鑑賞講座『平家物語』一九八二年・尚学図書、『軍記文学の位相』再録、一九九八年・汲古書院、なお氏には、これに先行して「大夫房覚明——その生涯と文学」、古典遺産四、がある)

(9) 水原一氏「義仲説話の形成」(『平家物語に於ける義仲説話の形成』文学語学一八号・一九六〇年、『平家物語の形成』再録、一九七一年・加藤中道館)

(10) 武久堅「平家物語「横田河原合戦」の木曾義仲造型——「武水別神社・八幡宮大本堂」からの発進——」(日本文藝研究五十四巻四号・二〇〇三年三月)

(11) 武久堅「平家物語・木曾義仲と乳兄弟の物語を紡ぐ原点——母親の「託孤」と兼遠一族の「野望」——」(『軍記物語の窓』第二集、和泉書院刊、二〇〇二年二月)

(12) 福田豊彦氏「初期軍記物の庶民像——文部小春丸・押松丸・新三郎清経——」(新日本古典文学大系月報三七、第四三巻

付録、一九九二年七月)

(13) 延慶本で「今参り」の語例は他に一ヶ所、同じく木曾義仲関係で、鎌倉勢の入洛を目前に義仲が松殿の姫君との別れを惜しむ場面に、「木曾方仕ヒケル今参り、越後ノ中太家光ガ申シケルハ」と用いられている。二例のみであるが、「義仲伝承」に特有の語例と認めてよいのではないか。なお越後勢が義仲に加わるのは横田河原合戦以降と考えられ、よって義仲集団は、木曾の中原一族を核とする乳母子集団を第一に、第二に小諸の根井・小室集団があり、同じ「今参り」扱いではあるがその外周に第三軍勢として越後勢があったと推定することが出来る。

(14) 他に信濃国には『延喜式』卷十「神祇・神名」の「更級郡十一座」に「清水神社」も見えるが、これを祀ったと考えられる「清水郷」は今日の長野市に位置するので、地域的に見て「小諸」に位置する「清水駅」より蓋然性は低い。

(15) ちなみに「名躰合ハセバ」という表現は延慶本に孤例である。「名躰」は仏教用語とすれば「名と本体」の合致を意味する。表記は異なるが「妙躰」なら世阿弥の『花鏡』に説く「かたちなき所、妙躰也」に通じ、ここでは形を超越した根源の本性を合致させる意、つまり「帰国した夫と心を相通じさせる喜び」の表現となるか。

(たけひさ つよし・関西学院大学文学部教授)